

1968.4

文や運々な紹介が原稿

名古屋大学郷土研究会

~~郷土研究会~~

郷土の仲間を紹介しよう。

史跡を、野山をたぐり歩いていけば、気のすむ

やっ、素朴な^{人情}の民話を集めるやっ、石垣

を登り、堀の水を汲み、天守に上って一国の主

たらんと夢見るやっ、飛騨の山奥で一生^{生涯}を

みたりやっ、やっ、江戸を屋敷でバチニコかし

たりやっ、^{三バ}あ、水は飲もう、なくても飲も

うというやっ。女の子を追かけ、飲けるやっ。

文^{資料}を思ふものあり、理科学のあり。カワイ

コナヤン？あり。少数ながらみくろないつしよ

に本富の谷間に、古戦場^跡、城跡に、寺社に

名所旧跡致^所、くまなく歩きまわるのであ

る。機械文明、合理主義の中で人間^{疎外感}

郷土喪失感におびえる現代人。郷土も素朴な

土地を民族的に^{身体}で感^{ずる}ずる^{こと}によ

って、心の拠り所としてのふるさとを築こう

~~我々~~。単に仰然の中に閉いこもるの

なく。我々^共に語り、共に飲み、共に歩き、真

の人間をサークルを味わおうと^{思う}だ

躍進する

第8回

1967.6. 名入系 に 初参加 クラウド今原編

郷工研究会の目的と意義

戦後二十年、世界有数の先進国として発展する日本。その日本の現代社会は^{出来}大々なびずみは極度に進んだ機械文明、経済第一主義の人間性無視から来ています。

私達は社会の一歯車として生活し、マス・~~コミ~~^{コミ}の商業的宣伝流行にあおられ、~~新~~^新刹那的(瞬間的)快樂に身を任せ~~な~~^な、社会からの疎外感に脅えています。

~~そんな~~^{そんな}社会で生活する私達。都市の人々は都会から、農村の青年は村からの逃避~~を~~^を預っています。今や生活の拠所としての郷工は~~特~~^特減色~~を~~^をしています。あまりにも合理的であまりにも機械的な現代社会への不安が、人間疎外感、郷工喪失感とに表れています。

この郷工喪失感と人間疎外感^{からのがれ、ために}は、~~戦前~~^{戦前}に古いものへのあこがれや、ふるさとへの郷愁の中^にに開き籠ろうというのではなく、~~その中に~~^{その中に}安らぎを見い出すと共に、本来の人間性を回復^に、民衆の忍耐力~~を~~^を、郷工を理解することによって、一個人の社会への~~大々~~^{大々}より強い連帯感と心の拠所としてのふる工を創造しようとしているのです。~~と~~^と、民衆の歴史と文化の中にこそ、人間疎外感に郷工喪失感に脅える現代日本人の人生の糧が存在すると考えるからです。

「ふるさと、それは母親のやさしさであり

あすへの~~再生産~~^{再生産}
活力を~~生み出す~~^{生み出す}
の泉である

我々はよく歩きます
伝統の地、ノアの地を
~~歩く~~

以上の目的達成のため、具体的活動

。まず郷土をよく知り、理解する(それによって郷土へ愛着
を誘い、地域社会とのよりよい関係をつくりだす)
~~に重点を置いていく。~~

~~このようにして~~ 歩くことをとりあげました。~~これは~~
機械文明の花形である自動車~~の~~ 歩きの文化の
抵抗が歩くことを楽しくしています。古来の伝統が
現代社会で根強くいきている。郷土、町並、山、川、
のりもの地。そんな所を歩く喜びは無類なものがある。

今や活動の中で歩くことそれ自体が目的化していま
す。知人、同好、仲間、行旅の第一歩は歩くことだ。
もう一つの特徴は、郷土の文化に積極的に関与してい
る。土地の文化の民話、伝説、講談、昔話の戦い話
などにもう一つの歴史を感じることもできます。又丘の上で谷
間の片隅で、碑文や遺物の基を探ることもあつた。
それらを集めて、部会に討論し、考へた。

こうして歩いて、体系的にじっくりと郷土を、自然を、見
聞、感じ、考えて、身体全体で郷土を根本の文化を
とて、現代人の文化を、民衆の文化を、~~文化~~ 文化として
同じの活動に精を出しています。

今後の課題として

- ・ いかにかいこの研究をまとめる、目的への方向性
をたてていくか、技術的か、本質的かの課題
- ・ 平らな旅行、観光にばかりはどめか
- ・ 研究課題は、いかにかいこの文化を、

②

郷土研究会のあゆみ

・1965.2

発足

広く知識、見聞を世界に求め、学生にもともふ、新しい方法で実践的・体験的に学ぶ事を

1965年度

古戦場シリーズ

(単に郷土史に限らない事を前提にして)

何々人の好み、興味本位に

1. 桶狭間古戦場

・五つのとりびと二つの城

2. 清須城址

3. 関ヶ原古戦場

4. 小牧・長久手の戦い

春合宿

渥美半島一周 徒歩旅行

半島特有の風土と気候、農業、渡辺華山の地

1966年度

4月～7月 サークルの目的と意義について論争 既存の活動に疑問?

何々人の意見 まじり出す 活動低迷

サークルのイメージ、目標

8月 夏季合宿

木曾十一宿(中仙道) 徒歩

木曾の食と藤村の地、時代錯誤の旧街道

10月～1月 名正屋城と名正屋人 名正屋城における現代名正屋人気質へ

1. 名正屋城建築まじりの名正屋

2. 名正屋城築城

3. 城下町

4. 町民の生活

春合宿、奈良・柳生街道... 一 大和路 一

↑ ● 剣の道 柳生の里

↓ ○ 日本人の心のふるさとを求めて

6月 足利繁 初参加

郷土研究会の目的と意義について

現代社会のひずみは

機械文明、経済主義の人間性無視からきて
いる。 公害 交通手段

又、マス・プロによる商業的流行、セリナ的快樂
にふけ、単なる自己とう酔に酔っている現代
人。 社会の歯車として毎日をおくせく働く現代人

我々は 社会からの人間疎外感 と 郷土喪失感 にうちひしがれています。

そういう社会で生活する我々 毎日生活する町に
郷土から抜け出そうとしています。 それには心のよりどころとしての故郷は存在しません。

文明社会流行、にふけまわっている日本人、日本人
民衆と共に伝統文化をあきらめ、西洋の又、最新の、マニマ
にあおられた流行にふけまわっているハイテク人
間の文化。 すべてが機械的で合理的で人間。

01 人間疎外感 → 心のふりこ

02 郷土喪失感 → 地理的ふりこ、肉親

1. 2. ~~越えて~~ どのように打ち破るか

~~越えて~~ 古いものへのあこがれ、ふはさてへのきこえ
の中にこいともうとしっているのではない

そのものゝためである。ふるさとへのまなざし
の中にはほんとうの安心感と本来の人間性を見出し、
新しい現代人の心のよりどころとして、
郷土を求め、人間性の解放をめざし、
（日本人の考える）心のふるさとをふめたい。と
古いもの、ふるさと、民衆の生活と文化が伝わる。
これを知ることによって現代人の人生の軌道が
変わる。

以上の目的を達成するために我々は次のような
活動をしている。

- ・まず郷土をしることに重点をおいている。
- ・そして適切な方法として歩くことを選び出した。

いやむしろ機械文明の花形である自動車、
この交通機関への抵抗

より素朴でより人間的なうね、あつちの村
の街道、や町並、自然のままの地、そんな所であ
るべきは当然のものである。

今や活動の中で歩くことそれ自身の楽しさを味わ
う場所になっている。

人間疎外感、打破の第一歩はあつちで、
もう一つの手段

・その土地の中へ入っていく。土地の人々と親睦的に
話し、伝統文化、伝統民衆をよく、部会で
解説等、郷土に、古きをよみ考へる。

こうして歩き、見、聞き、感じ考へて全体
で郷土を心のふるさととして受けとめよう
と求めている。

郷土のあゆみ

1965.2. 発足.

~~広く知識, 見ふも世界に~~ 郷土はくせとして.
知識, 体験を広く求め. 学生にもいそふたけい
方法で 実践的, 体験的に 学ぶ事を 目的とし.

— 郷土

1965 百戦場シリーズ

1.

2.

戦後二十年 世界有数の先進国として発展する日本。その日本の現代社会は大きなひずみは極度に進んだ機械文明 経済第一主義の人間性無視からなっています。

我々は社会の一歯車として働き、マス・プロの商業的流行にあおられ、瞬間的快樂に身をまかせながらも、社会からの疎外感に悩んでいます。

そういう社会で生活する私達。都市^{の人々}は都会から又農村の青年は村から逃避を願っています。今や生活の心のよりどころとしての郷土は存在していない。

あまりにも合理的であまりにも機械的な現代社会への不安が人間疎外感、郷土喪失感として表われてきます。

この郷土喪失感と人間疎外感を打つやぶるために単に古いものへのあこがれやふるさとへの郷愁の中に閉じ籠ろうとしているのではありません。その中に安らぎを見出すと共に、本来の人間性を回復し、日本民族の思想を解き、郷土を知ることによって日本人の社会への人間へのよりどころとしてのふるさとを創造しようと始めているのです。

(日本人の歴史的な考え
日本人の根拠に於ける
思想 → 現代人の道徳)

~~ふるさと、ふるさと、民衆~~
それはこのこと、民衆の「変」と文化の中にこそ人間疎外感に郷土喪失感に悩んでいる現代日本人の人生への糧が存在すると考えるからです。

郷工研究会 展示の目的

みなさん 今回は、

お忙しい中 ようこそ 御来場 下さいました。

さて、~~今年~~ ^{今年} からはじめて ~~郷工研究会~~ ^{郷工研究会} を
参加の

紹介 して 我々の活動の目的 と意義をい
いたたいと思っております。 それと共に 共に
発展 して いこうと思っております。